

製鉄記念室蘭

「デスカンファ」開始2年

ケア支援の多様化、連携強化に

室蘭市の製鉄記念室蘭病院（松本高富理事長、前田征洋院長・347床）は、デスカンファレンスを開始して、2年近くが経過。退院支援・調整を意識した関わり、疼痛コントロール介入が増え、患者や家族に寄り添うケア支援も多様化するなか、多職種連携による医療の質向上につながっている。

がんや消化器、血液疾患からデスカンファレンスを患者などが入院している病棟は、看取りが多

「主治医からの病状報告と患者に対する思い」を「看取りの状況、看取りたい看護師の思い」を受け持ち看護師の思い（症状や疼痛コントロール状態、知識、情報共有など）が、普段から終末期を意識した関わりが醸成されるようになった。

チームとの連携が深まったが、いずれも8割を超えていた。

自由記載では、早期から今春からのパートナーシップ・ナッシング・シスことや、▼最期の望みをチーム（PNS）導入で考え、関わる▼外泊、自宅の過ごし方への考え▼が密になり、心身変化を困りごと相談や介入依頼への声かけといった意識が強くなったという意見が目立った。

現在ではイベント（誕生日など）などの意識や薬等の知識が向上し、入院前からの自宅訪問、グループケアなども実施。

今春からのパートナーシップ・ナッシング・シスことや、▼最期の望みをチーム（PNS）導入で考え、関わる▼外泊、自宅の過ごし方への考え▼が密になり、心身変化を困りごと相談や介入依頼への声かけといった意識が強くなったという意見が目立った。

現在ではイベント（誕生日など）などの意識や薬等の知識が向上し、入院前からの自宅訪問、グループケアなども実施。

Hospital & Clinic



デスカンファレンスは2週間以内に行っている

「主治医からの病状報告と患者に対する思い」を「看取りの状況、看取りたい看護師の思い」を受け持ち看護師の思い（症状や疼痛コントロール状態、知識、情報共有など）が、普段から終末期を意識した関わりが醸成されるようになった。

同病棟看護師28人を対象に、15年11月～16年1月に実施した意識調査では、デスカンファレンスを通して、「自らの看護ケアに変化があった」が7割強で、「症状コントロールを考えるようになった」患者や家族の関わりが変化した「医療